

離島における看護学生の“地域医療・看護体験”による学び

キーワード：看護体験，地域医療，離島，看護学生

○松浦幸子¹，家中ふみ代¹，上谷千代美¹，佐藤優子¹，吾郷美奈恵² 1: 隠岐広域連合立隠岐島前病院，2: 島根県立大学

【 緒言 】

3つの有人の島からなる地域（人口6,095人、高齢化率39.8%）にある唯一の入院設備を持つ病院では，“地域医療・看護体験”を平成22年度から常時受け入れを始めた。その背景には，離島という地理的な状況もあり看護指数にはゆとりがない現状において退職者もあり，診療報酬の大激減と看護師の平均年齢51歳という危機的状況に直面した。看護師確保対策として，少しでも自分達の看護を知ってもらおうとホームページや看護師ブログ等で情報発信を始めた。その結果，看護・医学生や現役の看護師を“地域医療・看護体験”として受け入れ，平成25年度は，この“地域医療・看護体験”を経て看護師2名の採用が決定している。

また，平成25年度から，臨床経験1年以上で夜勤経験のある看護師を対象に，1年間の「いろいろな色に変化する山コース」や「大きく包む海コース」の離島研修の受入を始めた。

病院は44床（一般病棟20床、医療療養型8床、介護療養16床）で、内科系総合医6名、薬剤師1名、看護師25名、他コメディカルスタッフを含め全職員数は70名で、中核医療施設としての役割を担っている。“地域医療・看護体験”はメールや電話等で随時受け入れ，体験期間や体験内容は希望を尊重し，宿泊場所等は病院が準備するとともに終了後に体験の感想文を提出するよう依頼している。また，対応を担当するリーダーは決めているが，職員全員で指導している。

今回の目的は，“地域医療・看護体験”の実態と看護学生が任意で提出した感想文から，学生の学びを明らかにし，今後の看護師確保に繋げるよう検討することである。

【 方法 】

平成22年度から24年度の受入実績を整理し，“地域医療・看護体験”を終了した看護学生が任意に提出した感想文から，学びを抽出した。

【倫理的配慮】

感想文は，依頼時に研究的に分析・公表する旨を説明し，自由意思による提出を求めた。また，分析は氏名等を削除

するなど，倫理的配慮に努めた。なお，この研究は病院長の承諾を得て行ったものである。

【 結果 】

平成22年度から24年度の3年間で202名を受入，延べ対応日数は873日で，1年間で平均67名，291日であった（表1）。看護学生は46名を受入，うち31名（67.3%）から感想文の提出があった。“地域医療・看護体験”により，看護職としての成長が確認できた（表2）。

表1 年度別“地域医療・看護体験”受入者数

	平成22年度	平成23年度	平成24年度	計
看護学生	24	18	4	46
医学・薬学生	24	56	28	108
看護師	3	7	5	15
中・高校生・他	17	5	11	33
対応日数	281	304	288	873

表2 看護学生の“地域医療・看護体験”による学び

カテゴリ	サブカテゴリー
地域医療のあり方	地域の特性を尊重 病院の使命や方針を理解 遠隔医療や後方支援病院を活用 「ないものはない」を納得 支え合う職場環境
看護のあり方	病棟・外来・訪問看護の一体化した体制 患者の積極的な医療参加 総合的な知識によるケア 医療(看護師)と保健・福祉(保健師)の協働
看護の素晴らしさ	生活を見る看護の原点 マイナス面の対策はプラス面に着眼 信頼関係を得る関わり いきいきと働く看護職
自分自身のあり方	看護職を目指した進路に自信 患者に向き合う姿勢を獲得 看護師像の発見 患者や家族から学ぶ

【 考察 】

突然の“地域医療・看護体験”受入対応には苦慮することも多々あるが，始めてから3年が経過し，その効果が実感できるようになった。今回，感想文を分析したことで，体験者自身の看護職としての意識の変化やこれからの自分に対する目標など，それぞれの成長が観られ，育て・育つ“地域医療・看護体験”であることが明らかとなった。

引き続き様々なニーズに対応できる研修を組み立てると共に，病院の使命の一つとして研修を継続していくことが重要であることが認識できた。

